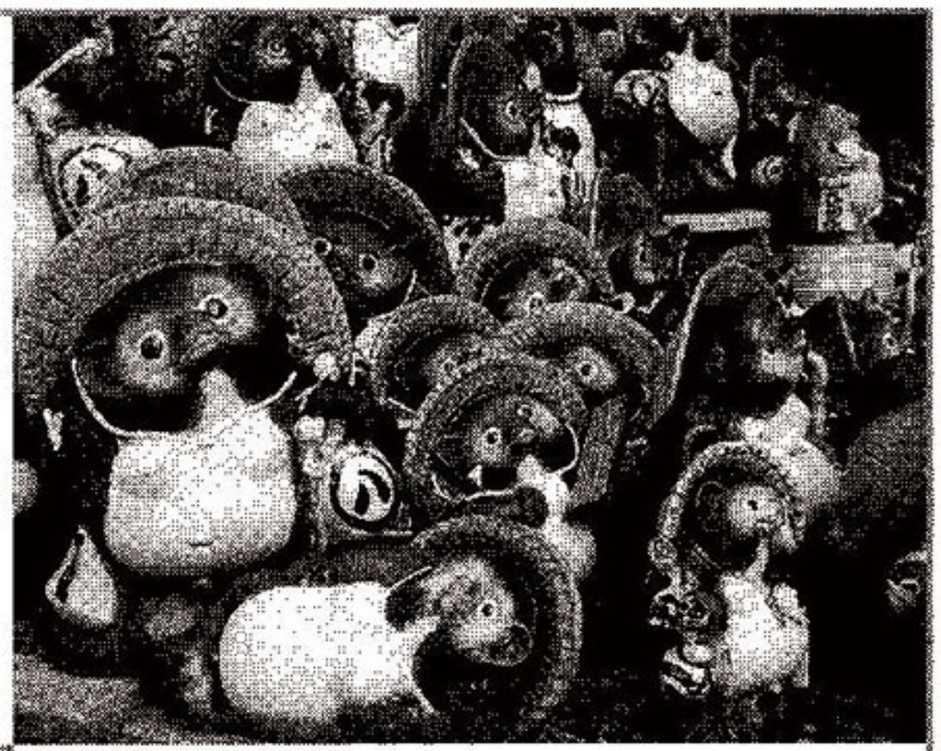
全国自治体
観光プランの今
第18回



信楽焼の狸――滋賀県甲賀市

瓢湖の白鳥――新潟県阿賀野市

嶋津隆文
松蔭大学観光文化学部教授
観光文化研究センター長

忍者と信楽焼と東海道宿場が3つの宝

滋賀県甲賀市

1　甲賀には3つの宝がある

甲賀市とは、どんなまちであろうか。人口9万人強。琵琶湖の南部に位置し、東は鈴鹿山脈、南は奈良県に接する。インパクトは必ずしも強いとはいえない。しかし、聖武天皇が紫香楽宮を造営してから1300年の長い歴史をもち、とくに戦国から江戸期のドラマに支えられたまちである。

その歴史に基づき、このまちは3つの宝物をもつ。一つは狸の置物で知られる、日本六古窯の一つである信楽焼だ。甲賀市の旧信楽町地域は陶器の里であり、鎌倉時代の中頃に信楽焼は興った。土の持ち味を生かした赤褐色と肌触りは今日に人気があり、町中[illegible]

甲賀の武士団は甲賀忍術集団ともいわれ、その奇抜な手法で全国の各藩で活躍したと語り継がれる。武将たちの天下取りの裏舞台で生きた忍者の里は、古くから人々に痛快さを与えている。

三つは東海道宿場町の存在である。甲賀市には東海道五十三次の一環として、49番目の土山宿と50番目の水口宿が設けられ、人と文化が行き交った往時の面影が随所に残る。そのにぎわいを今に伝える「水口曳山祭」など、見せ場も少なくない。

2　観光振興計画の背景

甲賀市は、平成22年3月に観光振興計画を策定した。「甲賀のお宝発見伝」と称したこのプランは、手作りの味わいをもつ計画書となっている。このプランが策定されたのには、2つの背景がある。

①　平成16年の5町の合併

一つめは平成の市町村合併の影響である。水口、土山、甲賀、甲南、信楽の5町が平成16年に合併し、広大な自然と多様な歴史・文化をもつ甲賀市として発足したことである。この多様さを包摂した観光振興の方向性と、一自治体としてのまとまりを形成するため、計画策定が求められたのである。

②　平成20年の新名神高速の開通

二つめは高速道路の開通である。平成20年に新名神高速道路が開通し、京阪神や名古屋方面から1時間でアクセスできるようになり、加えて市内に3か所もインターチェンジが設置された。これを好機に、誘客気運が高まったのである。

＊

こうした直接的な背景のほかに、それまでの観光振興には「産業」や「経済効果」という視点が欠落していたとの反省がある。地域の祭礼や単発のイベントがもたれるだけで、統一的な観光振興の方針がなかったというのだ。そこで、市の上位計画たる甲賀市総合計画で掲げられた「人 自然 輝き続ける あい甲賀」の実現を図るとして、市全体での観光振興計画を策定したのである。

3　3つの行動指針

甲賀市の観光振興計画は、方針がはっきりしている。「観光による産業振興を通じて地域への経済効果を高

めます」

こう設定したうえで、以下の3つの行動指針を掲げ、その行動計画としたのである。

① 普段の生活の中に観光資源を見出しその魅力を高めます

第1の行動指針は、昨今、旅行形態が多様化し、いわゆるニューツーリズム志向になっていることに注目するものだ。何気ない普段の生活風景や地域特性をそのまま観光資源にしようとの判断がある。そのことで一過性のイベントによる誘客だけでなく、通年型の観光が推進できると期待するのだ。そのためにまず、地域の歴史や産業を観光の視点に立ってデータ整理し、観光資源カルテを整備することを提示する。他方で学校教育との連携を重視し、ボランティアガイドによる歴史文化講座や学校給食への地元産食材の活用などを図るとする。美しい農山村景観の保全への努力もこの指針での行動計画となる。

② 観光客の受け入れや交流のための環境を整えます

第2は、来訪者に対する受け入れ態勢の整備や、「おもてなしの心」、接客マナーを育成するものだ。道路や駐車場の整備だけでなく、観光案内所や案内看板の設置にも配慮しようとする。具体的には観光協会の強化や観光セミナーの開催、「まちかど案内所」の設置を図る一方、観光ガイドやまちの「顔」づくりの観光大使の必要性を訴える。また農家民宿や農業体験プログラムの確保、さらには農山村体験や交流事業を支援する「都市農村交流受入窓口協議会」の設置を求めている。

③ 「観光資源」を「観光商品」として売り出します

第3は、観光の産業化である。市内の観光資源にテーマや物語性をもたせてルート化し、相互に連携させて質を高め、点から線、線から面へ広がりをもたせて「観光商品」化しようとの方向性だ。

＊

こうした行動指針に基づき、例えば市内の観光業者や農業者、商工業者を対象に、観光での連携や新産業・新サービスの創出を図るため、ビジネスマッチングを実施するという。将来的な目標としては、市を挙げての集客イベントとなる「甲賀観光ビジネスメッセ」の開催を目指す。また広域連携への視点も強調され、旅行客の行動範囲の拡大などを踏まえ、隣接する伊賀市との連携なども取り組むとする

4　地域別の観光ゾーニング

以上のような行動指針と行動計画を提示したうえで、観光振興計画は地域別の観光戦略を示している。冒頭にあげた三つの宝物や、旧町の時代からの流れも踏まえ、①「甲賀流忍者」、②「信楽（紫香楽）」、③「東海道の宿場」という三つのテーマごとに市域をゾーニングし、重点的に観光振興に取り組もうとするのである。

①　「甲賀流忍者」（旧甲賀町、甲南町）

〝忍者の里〟としての「甲賀」の知名度は、市の大きな財産である。来訪動機につながる可能性は高く、また外国においても"Ninja"は日本の特徴的な存在として知られる。このため、行動計画では、「忍者の飛び出し人形」といったキャラクターを使い〝忍者の里〟の雰囲気を醸し出すこと、本年で3年目となる「忍者検定」の定着を図っていくこと、忍者を観光資源とする先進地の伊賀市との連携強化を図っていくことなどを示している。ちなみに伊賀市とは手裏剣対決等をし、負けた市が勝った市のポスターを1年間掲載するといった取り組みも行っており、話題を呼んでいる。微笑ましい知恵といえよう。

②　「信楽（紫香楽）」（旧信楽町）

「信楽焼」の知名度も、これまた全国的に高い。観光入込客の半数が信楽地域を訪れるともいわれる。しかし、安価な外国産陶器に押され、信楽焼の生産額は年々落ち込んでいる。そこで観光客の底上げを図るために、近隣の奈良、京都、石山といった観光地との交流を進めたり、本年度に「信楽まちなか芸術祭（信楽陶芸トリエンナーレ２０１０）」の開催に取り組む。また信楽高原鐵道との連携による観光客誘致を図るとしている。

③　「東海道の宿場」（旧土山町、水口町）

３つめのゾーニングとしては、旧東海道に着目する。甲賀市は東海道が東西に横断し、その名残の史跡や伝統が多くみられるところである。集客力のある寺社や沿道の宿泊施設と連携を組み、とくに団塊世代の転退職やウォーキングブームなどに着眼し、まちなかの活性化を目指すとするのだ。具体的には、街道筋の町屋や空き店舗活用によるコミュニティビジネスや立寄所の整備を進め、あるいは土山宿と水口宿の一体的なＰＲや観光整備を図るとするものである。

5　これからが勝負

甲賀市の観光振興計画は、このように方向性が明確で、戦略として大いに理解しやすい。手作りによる温かみも、充分に伝わる。しかし、計画として物足りなさがあることも否めない。一つめは、観光入込客数の動向や、観光消費額の推移といった、客観的な現状分析が示されていないことである。観光政策上の問題点の掌握に、やや不十分さがあるのだ。二つめは、計画の数字目標が掲げられていないことである。観光計画の策定には観光入込客数の将来目標などの設定は不可欠である。その点で、どうしても説得性を欠くのは否めない。しかし、だからといって甲賀市の思いの強さは変わらない。市の担当者の一人である伊東正樹主査の言葉は印象的である。

「当市の観光行政についてはまだまだ動き出したばかりです。だからこそ、これから思い切ってできることもたくさんあると考えております」。

１３００年の歴史の上に立つ甲賀市である。こうした次の若い世代の熱意に支えられて、どっしりとした観光行政が展開されていくことが期待されるところである。

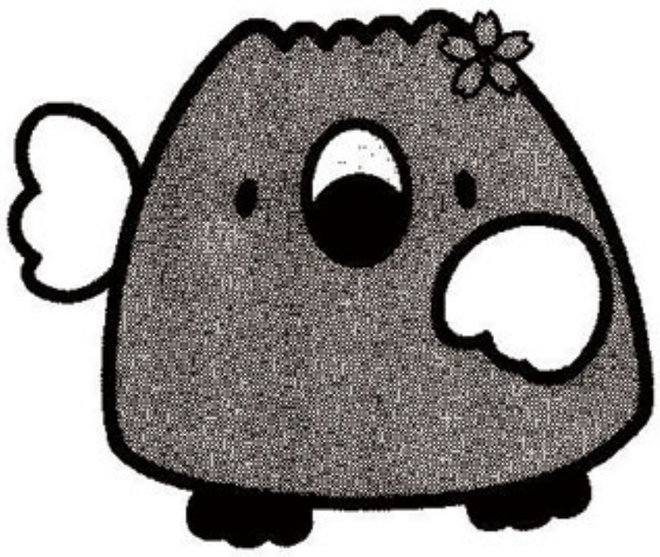
白鳥あそぶ・五頭の里・湯ったり

あがの

新潟県阿賀野市

阿賀野市は越後平野のほぼ中央に位置し、大河・阿賀野川と勇壮な五頭連峰をひかえ、自然に恵まれた土地である。水田の広がる穀倉地帯であるだけに、この緑の自然とそこで育まれた農畜産物が大切な観光資源となる。平成16年に安田町、京ケ瀬村、水原町、笹神村が合併して発足した新しい名称のまちである。人口５万人弱。新潟市のベットタウンの色彩ももつ。

しかし何よりもこのまちを全国的に知らしめているのは、瓢湖の白鳥であろう。国の天然記念物にも指定されている瓢湖は、遠方から飛来してくる約６千羽の白鳥とともに「白鳥の湖」として喧伝されている。ラムサール条約の登録湿地でもある。そしてもう一つ、代表的な観光資源とされるのは五頭連峰の麓に位置し、身体の治癒力を高めるラジウム温泉として日本有数とされる五頭温泉郷である。ちなみにこの市のイメージキャラクターは



ごずっちょ

「ごずっちょ」という。阿賀野市にそびえたつ五頭（ごず）山と可愛らしい白鳥をイメージし、メインカラーの青は阿賀野川を、頭には市の木である桜の花を飾っている。

1　観光振興基本計画の背景

阿賀野市の観光入込数は、160万人弱（平成19年度）。しかも県内からの客が126万人と全体の8割であり、県外からの誘客は少ないのが実態だ。この阿賀野市が観光振興基本計画（観光戦略プラン）を策定したのは、平成20年である。平成21年度度から5年間を計画期間とする。

「地域の観光資源を発掘し、光をあて、オンリーワンの素材として活かし、今後5年間の観光振興のあり方を示す」。

こう宣言して計画を策定したのは、何としても観光客を含む交流人口を増加させたいとの思いからだ。もちろん平成16年に合併した4町村の一体化の狙いもあったことだろう。加えて、いくつかの直接的な理由もある。策定時に行ったアンケートによると、観光で不満に感じた点として、①交通の便が良くない、②観光スポット数が不足している、③案内板など情報提供が乏しいと指摘される。五頭のラジウム温泉等は最高なのにPRが足りない、地元の食材にこだわった料理がほしい、トイレを清潔にしてほしいといった声もある。そこで市は計画の方向性を、「「住んでよし、訪れてよし」の環境保全を基本理念とし、〝健康と食〟、〝おもてなしの心〟をキーワードに交流人口の拡大と、ここに住む私たちがふるさとに誇りと愛着を持つまちづくりを目指します」と謳った。

2　観光振興基本計画の7つの戦略

この観光計画の内容について見てみよう。計画は7つの基本戦略をあげている。

①「健康づくりと食のまち」の推進

一つめは、第一の観光資源である「食」に着眼する。観光客は、地域の旬の食材を使った郷土料理やそこしかない食べ物を求めているのではないか。そこで郷土料理や伝統料理、薬膳料理のグレードアップを図り、あるい

は地場産の食材を使ったお土産用お菓子などの特産物開発を進めるというのだ。食と温泉を組み合わせた健康づくり（ヘルスツーリズム）の推進も重視される。

②「もてなしの心とコミュニケーション」の醸成

二つめは、市民が一丸となって「あいさつ運動」や「声かけ運動」を展開しようとするものだ。人情味あふれる明るいまちをつくるとし、例えば商店街の「どこでもトイレ」のおもてなし運動や、白鳥ガイドなどのボランティアガイドの育成を図る。また「県外ナンバーのバスを見たら、手を振ろう」といった呼びかけまで提案される。

③「体験交流による滞在型観光」の推進

三つめは、都市と農村との交流を図ろうというものである。JAやNPOと協働し、農作業体験や田舎生活体験などの受入れ体制を整備する。とくに、ブルーベリーなど観光農園の整備に力を入れる。あるいは中心商店街まるごと体験館とするとともに、瓢湖見学と五頭温泉街とのルート構築も目指す。多様な体験メニューを備えていこうとするものだ。

④「環境保全による観光美化運動」の強化

四つめは、阿賀野市の四季の美しさや魅力を提供するため、景観や施設の美化運動を進めるものだ。商店街のトイレ整備、清掃美化、プランター植栽運動等を呼び掛けるなど、その目線にはやさしいものがある。

⑤「人材の育成確保」の推進

五つめは、先導役や各部門でのスペシャリスト・リーダーの存在が欠かせないとの視点である。そこで各種体験のインストラクターや観光ガイドの確保、育成に努めようとする。

⑥「情報発信の体制と誘客活動」の強化

六つめは、テレビや新聞等の活用や、JRや高速道路サービスエリアの宣伝活動を拡大しようとする戦略だ。県人会や友好都市との連携等による誘客も取り組むとし、観光業だけでなく市民やJA、市職員らが全員セールスマンとなって誘客に取り組もうとするものである。

⑦「広域観光化の取り組み」の推進

七つめは、阿賀野川や五頭山等の観光資源を共有する隣接の市町村との連携を図るものだ。新潟県観光協会との連携や、新潟県の実施していた「大観光交流年」プロジェクトに伴う、羽越・会津列藩同盟での観光連携など

3　阿賀野市観光プランのユニークさ

全国の各市町村は、それぞれの特性に応じ、様々な工夫で誘客を働きかける。その点で、阿賀野市の観光プランには特筆すべきユニークさがあるといえる。

その一つは、計画としては珍しいほど率直に知恵を記載していることである。例えば、「リピーターを増やす視点」として、子ども達のニーズとしてカブトムシやザリガニ等が生息する環境づくりを訴える。そして、「ここには必ず親たちもついて来ます」と注釈するのだ。同様に女性、特に若い女性のニーズとして、ヨーグルトアイスのほか、色々なスイーツを創作しようとする。そのことで「女性が来れば男性陣も集まり、地元男性との触れ合いも期待される」と示唆するのだ。なかなかに戦術的である。また、日本タナゴなど小動物が生息していることや、白鳥等の飛来する瓢湖の存在を奇貨として、自然保護団体や環境を研究する組織等への働きかけも掲げる。そうすれば「環境フォーラムやシンポジウムの開催地、バードウォッチングや環境調査の場として最適で全国から多くの人が訪れるようになります」と。これほど手のうちを明記する阿賀野市の大らかさと積極性は、大いに評価して然るべきだろう。

もう一つのユニークさは、計画の具体性である。例えば「モデルコース」例の掲載である。半日・スポットコース、一日周遊コース、一泊二日コースと各メニューを記載し、そつがない。「このプラン（計画）を絵にかいた餅にしない」（渡辺滝雄商工観光課長）という、市としての強い思いの表れともいえようか。ちなみに一泊二日コースは、次のようにきめ細かく計画に掲示される。

（一日目）梅護寺→ヤスダヨーグルト→吉田東伍記念博物館→孝順寺→庵地焼き・安田焼き→うらの森（昼食）→五頭薬用植物園→やまびこ通り→五頭温泉郷宿泊

（二日目）五頭温泉→笹神郷土資料館→羽黒の歓迎等の清水→瓢湖→水原代官所→街中ぶらり（昼食）→ふるさと公園・市立図書館→帰宅

4　阿賀野の名も日本人の心に浸透させる

ところで、当地に記念博物館が建てられている地理学者・吉田東伍（旧北蒲原郡安田生まれ）は、日本地名の最初にして最大の辞書とされた「大日本地名辞書」を明

治後期に編纂している。郷土をこよなく愛したこの大学者は、人間活動の舞台としての「土地」と、そこに刻まれた歴史の語り部として「地名」を大切にすべきことを説いたことでも有名である。

「白鳥の湖」といわれる瓢湖は、江戸の寛永年間（16世紀）に農業用水地として築造された湖だ。かつては上堤と下堤との二つに分かれ、瓢箪の形をしていたことから、瓢湖と呼ばれるようになった。昭和25年の地元の一翁が餌付けを試み、昭和29年に成功したことから、この湖は「水原のハクチョウ渡来地」として国の天然記念物となって今日に至っている。このように瓢湖の地名には、先人の愛着心と努力の跡が込められている。

新たな自治体として発足して間もない阿賀野市の知名度は、まだ高くない。しかし「阿賀野」の地名も、「瓢湖」と同様に、そこに込められたこの地の人々の愛郷の思いが伝わってくる。それゆえ、これらの地名がもう一つの阿賀野市の観光の魅力となって、さらに多くの来訪者に愛されていくものと信じたい。そこにこそ、吉田東伍を生んだこの地の面目があるというべきだろう。

メモ

四国88ヶ所巡り（お遍路さん）

四国88ヶ所は弘法大師（空海）にゆかりをもつ札所の総称であり、その地を巡ることを「お遍路」、「四国巡礼」などという。巡礼者は「お遍路さん」と呼ばれ、白装束に杖を持ち「同行二人（にん）」と書かれた菅傘をかぶる。弘法大師との二人旅の意味である。札所に到着するとお参りし読経を行い、その証を納経所で墨書してもらう。お遍路は、多くの文学や映画などの素材にもなり、とくに名作「砂の器」（昭和49年、野村芳太郎監督）では漂泊する親子を美しい風景のなかで描きつつ、人々に巡礼の姿を印象づけた。

地元の人は巡礼者にお茶や食べ物でもてなすが、これは「お接待」といわれる。1990年代以降は、観光ブームの中で一躍巡礼者が増加し、その数は年間30万人に上る。バスによる団体巡礼が大半であるが、車や伝統的に徒歩での巡礼を試みる人も少なくない。なお四国88ヶ所を模して全国各地に大小の巡礼地が創られている。また近畿地方の観音霊場をめぐる西国33ヶ所巡りや関東地方の霊場を巡る坂東33ヶ所、秩父34ヶ所も有名である。この3巡礼は、併せて日本百観音といわれる。

（出典：松蔭大学編『観光キーワード事典』）